

四国大学紀要, (A) 52: 83-96, 2019  
Bull. Shikoku Univ. (A) 52: 83-96, 2019

## 資料

## 岡本斯文の「徳島師範学校記」

## ―阿部有清・歿後百二十年展への解説補遺を兼ねて(其三)―

田中敏生

【キーワード】 蜂須賀治昭 蜂須賀斉昌 蜂須賀斉裕 蜂須賀茂韶 徳島市立内町小学校 徳島市立助任小学校

## はじめに

先に、本学附属図書館の企画展として「阿部有清歿後百二十年展」を催し(二〇一七年・二月～翌三月)、その展示資料についても解説の文章を草したが(文献⑪)、展示内容が多岐にわたるという事情もあって、細かくは説き尽し得ない事柄も少なくなかった。そこでその補遺を兼ねていくつかの資料の紹介・解説を試みた(文献⑫⑬)。本稿では、そうした作業の継続として、岡本斯文の「徳島師範学校記」を取り上げてみたい。

岡本斯文(一八四三―一九一九)は、儒者岡本晤室の嗣子であり、徳島中学校校長心得、徳島師範学校校長などを勤めた。《阿波藩儒として最後の人》(文献⑧、一一五頁)とも呼ばれる。彼が旧制徳島中学校の校長心得となったのは、明治十二年のことであったが、翌十三年には新居敦二郎(湘香)が代わって校長心得となり、越えて十四年には校長となっている。

斯文自身はといえば、明治十五年に徳島師範学校の校長となり、十八年までこの職にあった(以上、文献②「岡本斯文」による。本稿末の略年譜をも参照されたい)。斯文は、徳島中学校の校長心得であった時には「与徳島中学校生徒書」という文章を草していたが(文献⑬)、師範学校の校長

在任中には、この「徳島師範学校記」を書いている。前者が生徒に向けて呼びかけた勸学の言葉であったのに対して、こちらは歴史の記述であり、その分、大掛かりで、より改まった印象をも受ける。そしてこの文章は、これを読んだ当時の大書記官・大越亨も述べているように(第七段参照)、幕末から明治初期にかけての、徳島の教学の歴史を知る上でも大いに役立つと思われる。またこの文章は、『楽瓢庵詩文鈔』(明治四一年 徳島新報社刊)に収められており(巻上・第二十葉)、彼にとっても大切な文章の一つであったらしいことが窺われる。

以下では、この作品を便宜七つの段落に分けながら見て行く。それぞれ、原漢文に訓読と現代語訳とを併せ掲げたが、もとより試案の域を出ない。また語釈は事蹟の確認に重きを置いた。これらをめぐる不備については、博雅の御高教を冀う次第である。

なお『楽瓢庵詩文鈔』は、先に本学附属図書館で催した「阿部有清・歿後百二十年展」において、斯文にまつわる資料の一つとして展示に供したものである。そうした意味で本稿は、その解説の補遺をも兼ねる。

## 一 第一段（西丸御殿）

第一段では、師範学校の建っている西の丸が、藩主の隠居地であったことが述べられる。斯文が生れたのも天保十四年であり、後にも記されているように（第六段）、この点にいささかの因縁を感じていたようである。

## 【本文】

此地故猪津城西丸也。国主蜂須賀齊昌。嘗為菟裘。工事告竣。実天保十四年四月廿五日也。齊昌以其十月辭職移居焉。安政六年九月齊昌薨。齊裕乃以為後宮。

## 【訓読文】

此の地は故と猪津城の西の丸なり。国主蜂須賀齊昌、菟裘を嘗為す。工事竣りを告ぐるは、実到天保十四年四月廿五日なり。齊昌其の十月を以て職を辭し居を移せり。安政六年九月、齊昌薨す。齊裕乃ち以て後宮と為す。

## 【訳文】

師範学校の建っているこの土地は、もともと渭の津城（徳島城）の西の丸であった。藩主の蜂須賀齊昌公は、ここを隠居地にしようとした。工事が終わったのは、実到天保十四年四月廿五日であった。齊昌公は、その十月に職を辭してここに移り住んだ。安政六年九月、齊昌公は薨じた。齊裕公は、ここを後宮にした。

## 【語釈】

○齊昌・蜂須賀齊昌（なりまき一七九五―一八五九）は、第十二代藩主であり、文化十年（一八一三年）に封を継いだ。天保十四年（一八四三年）、病のために職を退き、安政六年に世を去った。○菟裘・後掲（備考）参照。○齊昌辭職・岡田鴨里の『蜂須賀家記』（文獻⑤、一三七頁）に《（天保）十四年癸卯十月、公移病辭職、在職三十一年、世子襲封、是為大龍公（一十三代・齊裕）、老公更称彈正大弼、幕府命老公為後見、是年、移居西丸》とある。「移病」は病氣届けを出すこと。○告竣・竣工の日附については、

『阿淡年表秘録』（文獻②、七一〇頁。天保十四年の項）に《四月廿五日／西御丸御殿御普請出来御上棟》とある。○齊昌薨・『蜂須賀家記』に《（安政）六年己未九月十三日、老公（一齊昌）卒于西丸、年六十五、法諡曰峻陵院殿徳治宜範、葬万年山、藏遺髪于興源寺、私諡曰景公》（文獻⑤、一三八頁）とあって、あとに「贊」ふうの人物評が続く。○齊裕・十三代藩主の蜂須賀齊裕（なりひろ一八二一―一八六八）は、徳川慶喜の第二十二子であり、天保十四年（一八四三）に藩主となり、明治元年（一八六八）に亡くなった（第二段の【語釈】参照）。

【備考】「菟裘」は、隠居所のことである。左伝・隠公十一年の条に、公の言葉として《使宮菟裘、吾将老焉》の語が見える（中華書局・十三經清人注疏『春秋左伝詁』上冊・二〇八頁）。また、史記・魯周公世家第三（史記卷三十三）にも、隠公の言葉として《吾方宮菟裘之地而老焉》とあり、集解には《菟裘、魯邑也。宮菟裘以作宮室、欲居之以終老也》と注する（中華書局『史記』第五冊、一五二九―一五三〇頁。この注が先の『詁』に引かれている）。「宮為菟裘」の語は、こうした語句との関連において理解することができよう。なお、我が国・中世の説話集『十訓抄』（建長四年―一二五二年・序）には、「菟裘」という言葉の意味を知らなかったために失敗した話しが載せられている（巻十・第一話）。この語（あるいはその由来）は、我が国においても古くから知られていたであろう。文獻⑨では、副助詞の用例調査という研究目的との関連の限りに、この話に触れている。

## 二 第二段（明治以前）

第二段では、寺島学問所や江戸長久館の開設のことが述べられる。

## 【本文】

我阿波国往時未有学校之設。治昭患教化不振。土風不興。始造一小學於

寺島。命曰学問処。使士庶人子弟皆就学。而誘掖之法未至。媿靡之風未改。及齊裕襲封。深患之。欲泮励振興之。安政元年九月。造文武学校於江戸八町堀邸中。命曰長久館。將卜国内高燥之地。以宮大校。経画略備。未及設施而薨。実明治元年正月也。

#### 【訓読文】

我が阿波国は、往時未だ学校の設け有らず。治昭、教化の振はず、士風の興らざるを患へ、始めて一小学を寺島に造る。命けて学問処と曰ふ。士庶人の子弟をして皆な学に就か使む。而して誘掖の法未だ至らず。媿靡の風未だ改まらず。齊裕封を襲ふに及んで、深く之を患へ、之を泮励振興せんと欲す。安政元年九月、文武学校を江戸八町堀邸中に造る。命けて長久館と曰ふ。將に国内高燥の地を卜して、以て大校を営まんとし、経画略は備はる。未だ設施に及ばずして薨す。実に明治元年正月なり。

#### 【訳文】

我が阿波国には、そのころは未だ学校という設備は無かった。第十一代藩主であった治昭は、教化が振わず、士風の盛んにならないことを心配して、初めて小学校を寺島に造った。名づけて学問所という。士庶人の子供たちの誰をも勉強させようとしたのである。しかし、教育の効果は上がらず、眼の前の安楽を偷む風潮は変わらなかった。第十三代の齊裕が藩主になったとき、これを大いに心配して、勉学に奮起させようとした。安政元年九月、文武学校を江戸八町堀の藩邸内に造った。名づけて長久館という。それから国内に高燥の地を卜して大校を営もうとし、計画はほぼ整ったが、未だ実施しないままに薨ぜられた。実に明治元年正月のことであった。

#### 【語釈】

○治昭…蜂須賀治昭<sup>はるあき</sup>（二七五七～一八一四）は第十一代藩主であり、明和六年（一七六九年）に封を継ぎ、文化十一年に薨じた。彼の襲封について『蜂須賀家記』は《（明和）六年己丑十月、幕府命謙光公（＝第十代・重喜）免職、使公襲封、時公年甫十三、請親戚掃部頭伊井直幸讃岐守松平頼

恭等、為後見》（文献⑤、一一六頁）と記す。彼の薨去については、同じく『蜂須賀家記』に《（文化）十一年甲戌三月、病復発、二十四日卒于富田別館、年五十八、法諡曰良遷院殿敬翁義喬、葬万年山、藏遺髪于興源寺、私諡曰穆公》とある（一二三頁）。儒学に熱心であり、那波魯堂を阿波に招いたのも彼であった（備考二）参照。○学問処…『蜂須賀家記』に《（寛政三年）四月、造学校於寺島、命合田立誠（栄藏）為教官、統館中事、藩士以下至庶人、皆入学、立誠、昌因曾孫也》（文献⑤、二二六頁。へ）内は割り注）と記す。この学問所については、竹治氏の著書に詳しい（文献⑧、四七八～四八二頁）。○媿靡（トウビ）…靡衣媿食の略であり、目の前の安楽を求めて生活することとされる（大漢和…三卷・七三三頁）。○齊裕襲封…第十三代藩主・蜂須賀齊裕が封を継ぐのは、天保十四年十月のことであった。『蜂須賀家記』に《十四年癸卯十月、峻陵公（＝十二代・斉昌）告老、幕府命公（＝斉裕）襲封、兼任阿波守、命峻陵公為後見》（文献⑤、一四〇頁）と見える。○泮励（サイレイ）…努め励むこと。○長久館…後掲（備考二）参照。○齊裕薨…『蜂須賀家記』に《明治元年戊辰、正月六日、公卒于徳島城、在職二十六年、年四十八、法諡大龍院殿登雲泰源、葬万年山、藏遺髪于興源寺、私諡曰戴公》（文献⑤、一五八頁）と記す。

〔備考一〕那波魯堂が阿波藩に招かれたのは、安永七年（一七七八年）十月のことであった。『蜂須賀家記』には《（安永七年）十月、聘那波師曾為儒員、給祿百五十石》（文献⑤、一二〇頁）とあって、割り注で彼の経歴が詳しく記されている。またこの条は竹治氏の書物にも引かれている（文献⑧、一六六頁）。

〔備考二〕長久館（江戸）の開設を、斯文は安政元年と記すが、実際は安政三年（一八五六年）である。『蜂須賀家記』に《（安政三年）九月、造長久館於八町堀邸、漢学蘭学及算術量地術、至劍槍弓馬洋砲、分科各置教師、命年寄蜂須賀喜軌（山城）、仁尾永捷（内膳）等、為総奉行、使

邸中子弟講習之。二十八日開講。公親臨于館（文献⑤、一四三頁）と述べられている（～内は割り注）。但し、竹治氏は、『水竹居日記』に依りつつ、実際の開講は四月七日であり、九月二十八日というのは、『斉裕公親臨の下に、改めて開校式が行われたものと考えられる』（文献⑧、五五四頁の注一一）とされる。右に引いた『蜂須賀家記』の書き下し文も掲げられている。その衰微のさまについては、『阿波国教育沿革史』に『安政戊午（＝安政五年（一八五八））回禄ノ災（＝火災）ニ罹リ、再ヒ之レカ建築ヲナスト雖モ漸々衰微ニ趣キ、学生ノ数大ニ減セリ。元治甲子元年（＝一八六四）藩士ノ江戸邸ヲ払ヒ藩地ニ帰ルニ及ンテ之ヲ廃止ス』（文献⑮、二八頁。句読点引用者）と述べられている。

### 三 第三段（廃藩置県以前）

第三段では、茂韶が先代の遺志を受け継いで、西の丸に学校を整備し、教育に力を入れたことを述べている。

#### 【本文】

茂韶欲成先考之志。翌年正月十七日。移学問処于此。以為文学学校。時長久館既廢。因取其名以命之。三月置洋学医学二校于此中。以花園為練兵処。五月又置国学校及擊劍場。令藩士日入学校兼修文武。於是。教化大行。士風漸改。嗚呼茂韶之此舉。可謂能繼述先志者也。而茂韶患藩士身不修者猶多。欲使教官淳勵之。自書修身二字示之。教場扁額是也。今也朝廷大患天下之士身不修者多。学校之教。必以修身為先。則此舉亦可謂奉聖意者也。四年二月。又置小学校於此中。命曰西校。楣間所掲發蒙啓滯四字。即茂韶之賜也。

#### 【訓読文】

茂韶、先考の志を成さんと欲す。翌年正月十七日、学問処を此に移し、以て文学学校と為す。時に長久館は既に廃せらる。因りて其の名を取りて以

て之を命く。三月、洋学・医学二校を此の中に置き、花園を以て練兵処と為す。五月、又た国学校、及び撃劍場を置き、藩士をして日々に学校に入りて文武を兼修せしむ。是に於て、教化大に行はれ、士風漸くに改まる。

嗚呼、茂韶の此の舉、能く先志を繼述する者と謂ふ可きなり。而も茂韶、藩士の身修まらざる者、猶ほ多きを患へ、教官をして之を淳勵せしめんと欲し、自ら修身の二字を書して之を示す。教場の扁額、是れなり。今や朝廷、天下の士、身の修らざる者多きを大いに患へ、学校の教へ、必ず修身を以て先と為す。則ち此の舉も亦た聖意を奉ずる者と謂ふ可きなり。四年二月、又た小学校を此の中に置く。命けて西校と曰ふ。楣間に掲ぐる所の發蒙啓滯の四字は、即ち茂韶の賜はりし也。

#### 【訳文】

茂韶侯は、先代齊裕の遺志を成就させようとした。翌・明治二年正月十七日、寺島の学問所を西の丸に移し、文学学校とした。この時すでに江戸の長久館は無くなっていたので、その名前を取って同じ呼び名にした。三月、洋学・医学の二校をこの中に置き、お花畑を練兵処にした。五月に、国学校、及び撃劍場を置いて、藩士を毎日学校に通わせて文武の両道を研修させた。そこで教化が大いに実を結んで、武士の気風が漸く良くなってきた。ああ、茂韶侯のこの事業は、よく先代の志を受け継ぐものだと言える。しかも侯は、素行の悪い藩士が未だに多いことを心配し、教官にこれを督勵させようとして、自ら「修身」の二文字を書いてこれを示した。教場にかかっている扁額が、それである。今や朝廷は、天下の人士に、素行の悪い者の多いのを大いに心配しており、学校の教へは、必ず修身を第一にしている。したがって、茂韶侯のこの事業も亦た天子様の御意向に従い奉るものだと言える。四年二月、さらに小学校をこの中に置いた。名づけて西校という。梁にかけてある「發蒙啓滯」の四文字は、茂韶侯から賜ったものである。



## 【語釈】

○茂韶…第十四代藩主・蜂須賀茂韶（一八四六―一九一六）は、東京府知事、貴族院議長、文部大臣など高官を勤めたが、地元徳島の教育にも熱心であった。また「誠堂」の号を持ち、書にも堪能であった（文献④・一一五頁の書道人物関係表にも名を連ねている）。○長久館（徳島）…『蜂須賀家記』に《明治二年正月》十七日、以西丸為文武学校、号長久館、二十四日、公臨鷺間（堂名）、命文学教授講三事忠告牧民心鑑從政名言、使諸有司聽之、因頒賜三書、後四九之日以為例（文献⑤、一七八頁。へ）内は割り注。『三事忠告』『牧民心鑑』『從政名言』はそれぞれ書名とある。長久館の位置は、文献⑦の地図で確かめることができる。それによると、西丸の西半分が「練兵所」であり、城山に近い東半分の北側が「撃劍所」、南側が「長久館」となっている。なおこの地図は、文献⑩のサイトでも画像を拡大しながら見ることができる。また長久館の校舎の写真是、文献⑭冒頭に掲げられている。○洋学・医学…『蜂須賀家記』には《明治二年》三月、移洋学医学二校於西丸、以西丸花園為練兵所（文献⑤、一八〇頁）とある。『洋学校』の創設については、同じく『蜂須賀家記』に《慶応元年》十一月、公創洋学校於寺島（一五六頁）と記す。他方「医学学校」については『阿波国教育沿革史』（文献⑮、四〇頁）に詳しい記事が見える。①寛政七年（一七九五）の創立であること、②文化四年（一八〇七）に安宅（あたけ）の天文台の官舎に移ったこと、③天保十四年（一八四三）のころ堀裏（へうら）町に新築したこと、④安政四年（一八五七）に蘭書も読み始めたこと、⑤明治二年（一八六九）に西丸長久館に移ったこと、などが述べられている。寛政七年の創立については、『阿淡年表秘録』（文献②、五四二頁）に《七月》十九日 京都医者 小原春造 為御

雇式拾人御扶持方被下医師学問所講主二被仰付」と記されている。○国学校・撃劍場…『蜂須賀家記』には《明治二年五月》十七日、置国学教場於長久館中、十八日、創撃劍場於長久館（文献⑤、一八一頁）と記す。

○修身二字…文献⑥（一三九頁）に、この二文字の写真が掲げられている。○小学校…〔備考〕参照。○発蒙啓滞四字…それと同じものかどうかは分らないが、文献⑮の十六頁には、「発蒙啓滞」の書の写真が、「創立五十年記念絵はがき」からの転写として掲げられている。

〔備考〕『蜂須賀家記』には《明治四年》二月、創小学校於西丸、尋又創于寺島助任及洲本（文献⑤、一九八頁）と記す。他方『阿波国教育沿革史』によれば、「西小学校」の沿革について《明治四年八月本校ヲ開設シ、同年十月生徒ノ幾分ヲ寺島町南小学校へ移ス。後明治五年十月本校ヲ廃止ス》（文献⑮、四三頁。句読点引用者。以下同）と述べている。創設の時期が二月と八月とで食い違うようであるが、『内町小学校沿革史』（文献⑦、六―七頁）によると、西丸にできた小学校は次のような流れをたどっている（太陽暦の使用は明治五年十二月からなので、それ以前の日付は旧暦のものである蓋然性が高い）。

・明治四年二月五日…藩立「西の丸小学校」開校（長久館内）。  
・明治四年八月…「西小学校」と改称（南小学校の開校とともに改称か）。

・明治四年十月…生徒の一部を南小学校に移す。  
・明治五年十月…「西小学校」廃校。  
・明治五年十一月…「共立西小学校」開校。  
・明治六年一月…「共立西小学校」廃校。  
・明治六年二月十一日…「第一大区一番小学校」開校。  
・明治六年三月…「期成小学校」と改称。  
・明治七年五月…期成学校（師範学校）が置かれ、生徒は洪化小学校に移る。

『蜂須賀家記』は「西の丸小学校」のことを、『阿波国教育沿革史』では「西小学校」のことを、それぞれ述べているのであろう。次に「南小学校」については、『阿波国教育沿革史』に《明治四年八月開校。同年

十月本校生徒ノ幾分ヲ北小学校ニ移シ同五年十月閉校ス（文献⑮、四五頁）とある。これも『内町小学校沿革史』（文献⑦、七―八頁）の記述によれば、次のような流れをたどったことになる（藩立校の開校は六月とされる）。

・明治四年六月十一日（原文は「六月十一月」とあるが、私に改めた）…藩立「南小学校」開校（寺島本町字北二百四十七番）（この条に『八年十一日稽古始め』（七頁）と記されているが、「八月」の誤りではないかと思われる。そうであれば、『阿波国教育沿革史』の「開校」はこれを指しての記事と受け止められよう）

・明治四年十月…生徒の一部を北小学校に移す。

・明治五年十月二十八日（原文は二十八日）…「南小学校」廃校。

・明治五年十一月五日…「共立南小学校」開校。〔共立学校南舎〕と記す文献もあると注されている

・明治六年一月…「共立南舎」廃校。〔共立南小学校〕を指すのであらう

・明治六年二月七日…「第一大区二番小学校」開校。〔前条と併せて、「学制」（明治五年八月に頒布）に基づく改廃とされる。二月七日が旧暦では正月十日であることも注記されている）

・明治六年三月…「洪化小学校」と改称。

・明治七年五月…「期成小学校」と併合。

・明治十年九月…「寺島小学校」と改称。〔校名に「内町」の名が現われるのは、昭和十八年の「内町国民学校」からである）

さらに「北小学校」については、『阿波国教育沿革史』に『明治四年十月開校。同五年十月閉校ス』（文献⑮、四六頁）と記す。『助任小学校の百年』（文献⑮、十六―二十二頁）によると、「北小学校」は次のような流れをたどっている（藩立校の開校は十一月とされる）（因みに、この本の二十三頁には、『小学拾級算法』（阿部有清撰。文献⑪、一一九頁で

少しく解説を施した）が、明治十年頃の算術教科書として写真で紹介されている）。

・明治四年四月一日…藩主・茂韶、「北小学校」校舎建設を命ずる（十月十一日落成）。

・明治四年十一月十五日…藩立「北小学校」開校。

・明治五年十月二十八日…藩立「北小学校」閉校。

・明治五年十一月五日…「共立北小学校」開校。

・明治六年一月三十一日…「共立北小学校」廃校。

・明治六年二月十一日…「第一大区三番小学校」開校。

・明治六年三月…「宝善小学校」と改称。

・明治十年三月…「助任小学」と改称（この項、冒頭の「校名と校印の移り変わり」による。本文・二十頁の明治十年の記事には「助任小学校」とあるが、二十二頁の明治十三年をめぐる記事に《小学の下に一字「校」がつけられた》と述べられている）。

・明治十三年五月一日…「助任小学校」と改称。

これらの記述を総合すると、明治四年二月の「西の丸小学校」が最も古く、明治四年の六月から十一月ごろにかけて「西・南・北」の三校ができ（以上藩立）、明治五年にそれが共立となり、明治六年に共立を廃して「一番・二番・三番」となり、さらに改称して「期成・洪化・宝善」となり、明治七年に「期成・洪化」が合併し、明治十年に「寺島・助任」の名を冠するに至る、といったふうになるであろうか。因みに、「藩立」と「共立」との違いについては、岡本斯文「富田浦区学記」（文献⑳、六六頁）に見える次のような記述が参考となろう（原文正漢字。返り点・送り仮名を省略し、引用者による訓読文を添える）。

阿波国名東郡。原有旧藩主蜂須賀氏所営小学校三基。官仍旧貫。給其費。命曰公学。又有志之士。相謀出財以立学者。命曰共立校。（阿波国名東郡は、原と旧藩主蜂須賀氏営む所の小学校三基有り。官、旧貫

に仍りて、其の費を給す。命けて公学と曰ふ。又た志有るの士、相ひ謀りて財を出し、以て学を立つる者は、命けて共立校と曰ふ。」(このあと、地元住民から資金を募る話が続く)

#### 四 第四段 (廃藩置県以後)

第四段では、廃藩置県後の、西の丸での教育事業の沿革が述べられる。師範学校による教員養成、中学校設置による教育水準の向上、図書館開設による自発的学問の隆昌、等々がそれである。廃藩置県を機に、蜂須賀茂韶は徳島を去って東京に赴いたが、その後も、西の丸でこれだけの成果を上げているとの趣意であろう。謙辞も添えられている。

#### 【本文】

其秋。王制鼎革。藩廢為県。而館又廢。唯有小学校而已。五年十月。朝廷頒学制。小学校又廢。於是。有志於興学之士相謀。会学徒於此。号曰西舍。六年二月。遵新令復置小学校。命曰一番小学校。尋改曰期成小学校。七年五月一日。始置師範学校。附以小学。爾来学制屢易。而課程愈嚴。学徒業成。奉職小学者。幾三百人。其裨教化也。可謂大矣。九年一月。創徳島中学校也。亦於此中。而前三年。既立其課程以教授之。則今日致若彼之盛。亦可謂基于此者矣。十五年十二月。置書籍館。其典籍多是蜂須賀氏所藏。嘗在花園書庫者。於是。好学之士日來。読者踵相接。其益県人。亦可謂大矣。則此校之有補国家之風化。豈淺淺乎。為之長者。其任蓋重矣。而斯文以淺劣当其任。豈可不戒懼乎。

#### 【訓読文】

其の秋、王制鼎革し、藩廢せられて県と為る。而して館もまた廢せられ、唯だ小学校有るのみ。五年十月、朝廷、学制を頒き、小学校も又た廢せらる。是に於て、学を興すに志有るの士、相ひ謀りて、学徒を此に会す。号して西舍と曰ふ。六年二月、新令に遵ひて復た小学校を置く。命けて一番

小学校と曰ふ。尋いで改めて期成小学校と曰ふ。七年五月一日、始めて師範学校を置き、附するに小学を以てす。爾来学制屢ば易はり、而して課程愈よ嚴なり。学徒業成り、職を小学に奉ずる者、幾三百人。其の教化に裨するや、大なりと謂ふ可し。九年一月、徳島中学校を創むるや、亦た此の中に於てす。而して前三年、既に其の課程を立てて以て之を教授す。則ち今日彼の盛なるが如きを致すも、亦た此に基づく者と謂ふ可し。十五年十二月、書籍館を置く。其の典籍、多くは是れ蜂須賀氏の藏する所、嘗て花園書庫に在りし者なり。是に於て、学を好むの士、日々に來り、読む者の踵相接す。其の県人を益すること、亦た大なりと謂ふ可し。則ち此の校の国家の風化に補する有ること、豈に淺淺たらんや。之が長と為る者、其の任蓋し重からん。而して斯文、淺劣以て其の任に當る。豈に戒懼せざる可けんや。

#### 【訳文】

明治四年の秋に、王制が大いに変わり、藩を廢して県とした。そこで長久館も廢され、小学校だけになった。五年十月に、朝廷が学制を公布し、小学校も無くなった。そこで、学問を盛んにしようと考えている人たちが話し合つて、生徒たちを西の丸に集めた。これを西舍と呼んだ。明治六年二月、新しい法令に従つて復び小学を置いた。一番小学校と名づけた。その後、呼び名を改めて期成小学校といった。明治七年五月一日、初めて師範学校を置き、小学校を附属とした。それ以来、制度はしばしば變つて、教育課程はいよいよ嚴密になった。師範学校に学ぶものは学業をおえて、小学校に奉職するものは三百人以上、児童の教化に大きく貢献している。明治九年一月、徳島中学校を始めたのも、これまた西の丸においてである。そして三年前に、課程をきちんと調え定めて、教育を始めた。さすれば、現在、中学校があのようになつたのも、やはりこの西の丸あつてこそだと言つてよい。明治十五年十二月に、書籍館を置いた。その書物は、多くは蜂須賀氏の所藏として、花園書庫に収まっていたものである。する

と、学問の好きな人が毎日のようにやってきて、足の踏み場もないほどの混雑ぶりである。これも、県人の教化に大いに役立っていると言える。してみれば、この師範学校の、国家の風化への貢献には、並々ならぬものがある。その長となる者の責任は重いはずである。それなのに、わたくし岡本斯文のような資質の低劣な者がその任に当たるのだから、恐れ慎まないわけには行かない。

### 【語釈】

○廃藩置県…『蜂須賀家記』にも《明治四年》七月十四日、朝廷廃藩置県、召諸藩知事、免職徙居東京》（二九八頁）と記す。○明治五年…『蜂須賀家記』は、明治五年正月二十六日に蜂須賀茂韶が洋行したことをもって記事を閉じるので、その後の西丸についての記事を見出すことはできない。○五年十月…藩立学校廃止の時期を言うのであろう。学制自体は八月に頒布されている。もともと次の「一番小学校」について《遵新令》と記すので、こちらも「学制」に基づく処置と捉えていることになる。○西舎…前段（備考）に見える「共立西小学校」のことであろう。「共立南小学校」にまつわる注記から、そう推測できる。○一番小学校…前段（備考）参照。

○期成小学校…前段（備考）参照。『徳島県教育八十年史』（文獻⑭、一五頁）に、「期成小学校」の卒業証書の写真が載せられている（卒業者は田中棟八氏）。田中棟八氏の回想記も引かれており、それには《明治五年私が十五の時、わが国の学制がはじめて定まりまして、前の西校が期成小学校となつたのであります。（中略）私は一番小学校すなわち期成小学校に入學して》（二五～六頁）とあって、生徒の側から見ても「旧西校」一番小学校＝期成小学校であったようすが窺われる。○師範学校…『徳島県教育八十年史』（文獻⑭、一七頁）には《明治七年五月一日に師範期成学校として開校式を挙げた》とある。同頁には「師範期成学校入學許可書」の写真も掲載されている。○附以小学…『助任小学校の百年』（文獻⑱、十九頁）の年表（明治八年・十二月の条）に《師範期成学校に付属幼年学

校が設置される（現付属小学校の前身）》と記されている。○徳島中学校…『徳島県教育八十年史』（文獻⑭、一九頁）では、《明治八年十二月十二日には名東県師範学校付属として変則中学校を置き》とあって、厳密には八年の暮れであったことが分かる（『百年史』では十二月二日とする。また十一月八日説をも掲げる。文獻⑲、一〇頁）。その後、明治十一年に附属変則中学校を廃して徳島中学校としたが、職員はなお師範学校と兼務であった（文獻⑭、二〇頁）。明治十二年に岡本斯文が校長心得となつたとき初めて職員も配された（同）。○前三年…明治十三年に校地を新町川南岸（現在の両国橋南詰め東側）に移して、学則も新たになつた（同）。これらの改革を経て、新居敦二郎（湘香…庚午事変で切腹した新居水竹の次男）が校長心得となつた（『百年史』文獻⑲・年表）。○書籍館…『百年史』（文獻⑲）の年表（明治十五年の項）には《徳島師範学校附属図書館を設置（本県における図書館のはじまり）》と記す。

### 五 第五段（西丸の隆盛）

第五段では、廃藩置県以後における、西の丸の隆盛ぶりを誇らかに語っている（後に記されるように、僅か二年後には、これも烏有に帰するのではあるが）。

#### 【本文】

夫自鼎革来。旧諸侯之城楼宮壺。往々頽圯。荆棘翳茸。風雨晦冥。索其斷礎。不可復識。唯聞颺颺鳥獸之嘯音耳。過之者不能無黍離之歎也。独此地不然。高臺巨櫓猶在。而日聞誦絃誦之音。鏘鏘相和。足以徵昭代之象。是可謂善變者矣。

#### 【訓読文】

夫れ鼎革自りこのかた、旧諸侯の城楼宮壺、往々頽圯し、荆棘翳茸と、風雨晦冥にして、其の斷礎を索むるも、復た識る可からず。唯だ颺颺鳥獸



の嗶音を聞くのみ。之を過ぐる者、黍離の歎無きこと能はざるなり。独り此地のみならず。高薨巨桷猶は在り。而して日々に誦絃吟喟の音を聞き、鏘鏘として相和す。以て昭代の象を徴するに足る。是れ善く変ずる者と謂ふ可し。

#### 【訳文】

そもそも廢藩置県以来、旧藩主たちのお城や宮壺【語釈】参照は往々にして崩れ去り、茨が生い茂り、風雨に曝されて、礎の跡さえ分からなくなり、ただ鼯鼠や鳥獸の叫び声を聞くばかりである。そこを通り過ぎる者は、その荒廢ぶりを嘆かずにはいられない。しかしこの西の丸だけは違う。大きな屋根が依然として聳え、毎日のように音楽読書の声が聞こえ、高らかに響き合っている。昭代の証しとするに十分である。すばらしい適応力だと言えよう。

#### 【語釈】

○宮壺…この語は《宮中で賜ふ酒壺》（大漢和…三卷・一〇〇九頁）のことであり、ここではやや文脈にそぐわない。「宮閣」「宮牆」など建物に関わる言葉のほうがふさわしいと思われるが、姑く原文のままの語を掲げて訳出することにした。○蓊茸（オウジョウ）…茂つて盛んなさま。○黍離之歎…国が滅んで宗廟宮室が一面の黍に覆われているのを嘆くこと。詩経・王風に《彼黍離離 彼稷之苗 行邁靡靡 中心摇摇》と歌うのに基づく。朱子の集注には《離離垂貌》《靡靡猶遲遲也。摇摇無所定也》《周既東遷。大夫行役。至於宗周。過故宗廟宮室。尽為禾黍。閔周室之顛覆。彷徨不忍去》と見える（群玉堂刊『詩經集註』三三～三四頁による。句点引用者）。○吟喟…書物を読む声。

### 六 第六段（感懷）

第六段では、師範学校との不思議な因縁を記して、執筆の意図を披瀝し

ている。

#### 【本文】

斯文所読者。唯古人所著之書。所知者唯古人所論之理。且性善病。不能通曉時事。是不可謂善變者也。而天下之風化日益以新。學術亦日益以新。則何以勝此職乎。每恐或害風化。曩請解職而不允。戒懼愈切。只修身共職而已。因謂。斯文之生。實以此堂竣工之日。而自移學問處于此。或為校員。或為學官。未嘗不時升此堂。而去職之日。則受茂韶命。校其所藏之書。故亦時往來此地矣。何其相遇之奇也。則解職不允者。所謂宿緣未除乎。因記前日之所聞今日之所見。書校壁以告後之長此校者。嗚呼是亦報昭代之一端也矣。明治十六年十一月。德島師範学校長一等教諭兼德島女学校校長岡本斯文記。

#### 【訓読文】

斯文、読む所の者は、唯だ古人の著す所の書のみ。知る所の者は、唯だ古人論ずる所の理のみ。且つ性善く病み、時事に通曉すること能はず。是れ善く変ずる者と謂ふ可からざるなり。而るを、天下の風化日々に益々以て新たに、學術も亦た日々に益々以て新たななり。則ち何ぞ以て此の職に勝へんや。毎に或いは風化を害せんことを恐る。曩に職を解かれんことを請ひて允されず。戒懼愈よ切なり。只だ身を修めて職を共にする而已。因りて謂へらく、斯文の生まるるは、実に此の堂の竣工の日を以てす。而して學問處を此に移して自り、或いは校員と為り、或いは學官と為り、未だ嘗て時に此の堂に升らずんばあらず。而も職を去るの日、則ち茂韶の命を受け、其の藏する所の書を校す。故に亦た時に此の地に往來せり。何ぞ其れ相遇ふの奇なるや。則ち解職の允されざる者は、所謂の宿縁の未だ除かれざるか。因りて前日の聞く所、今日の見る所を記し、校壁に書して以て後の此の校に長たる者に告ぐ。嗚呼、是れも亦た昭代に報ずるの一端なり。明治十六年十一月。德島師範学校長、一等教諭、兼德島女学校長、岡本斯

文記す。

### 【訳文】

わたくし岡本斯文が読んでいるのは、ただ古人の書物だけである。その知識も、ただ古人の考えを出さない。また生まれつき病気がちで、時事に通曉することはできない。これでは適応力があるとは言えない。それなのに、天下の教育は日を追ってどんどん進み、学術も日ごとにますます開ける。これで校長の職が務まるはずがない。教化を邪魔しているのではないかといつも恐れている。以前、辞任を申し出たのだが許されなかったで、戒懼の思いはいよいよ切実である。ただただ身を修め職責を慎むほかはない。そこでこう思った――わたくし岡本斯文の生まれたのは、実にこの堂の竣工の日であり、学問所をここに移してからというもの（明治二年）、校員になったり、教官になったりで、今まで折にふれてこの堂に昇らないことはなかった。しかも職を去るとき、ちょうど茂韶侯の命を受けて蔵書の点検することになって、それでまた時々ここにやって来ている。なんとまあ不思議なめぐり合わせではないか。してみると、辞任が許されないのも、世に言う宿縁がまだ尽きていないのではないか――。そんな気がするものだから、昔聞いたことや実際に見てきたことがらを記し、学校の壁に掲げて後に校長となる人に知らせるのである。ああ、これもまた昭代へのご恩返しの一端である。明治十六年十一月、徳島師範学校長、一等教諭、兼徳島女学校長、岡本斯文、これを記す。

### 【語釈】

○竣工之日…第一段の語注にも記したように、西丸の隠去所ができあがったのは天保十四年四月二十五日であった（阿淡年表秘録。文献②、七一〇頁）。他方、斯文が生れたのは同年の四月二十四日とされる（文献②、九二頁）。これらの資料に依る限り一日のずれがあることになるが、ほぼ同日と言つて言えなくもない。

## 七 第七段（追記）

第七段は、後からの追記である。西の丸の師範学校は焼けてしまったが、あるいは歴史を知るのに役立つかも知れないと思つて、再び標榜したというのである。

### 【本文】

此記之成。示大書記官大越亨【語釈】参照。亨曰。是徳島学校好歴史。乃囑仙田作蔵書之。掲于楣間。今茲二月十日午前七時。体操場火。風甚熾怒。十時始熄（原文「熄」とあるが、私に改めた）。高覺巨桝。尽為烏有。蜂須賀氏之典籍亦頗焚。而發蒙啓滯之扁。及作蔵所書。皆亡。何堪浩歎。既無校舎。不復用此記。然私謂。後之読者或有以観阿波国学校之沿革矣。復囑作蔵書之。十八年三月斯文又記。

### 【訓読文】

此の記の成るや、大書記官大越亨に示す。亨曰く、是れ徳島学校の好歴史なりと。乃ち仙田作蔵に囑して之を書し、楣間に掲ぐ。今茲に二月十日午前七時、体操場に火あり。風甚しく熾怒り、十時にして始めて熄む。高覺巨桝、尽く烏有と為る。蜂須賀氏の典籍も亦た頗る焚ゆ。而して「發蒙啓滯」の扁、及び作蔵の書する所、皆な亡ぶ。何ぞ浩歎に堪へんや。既に校舎無く、復た此の記を用ゐず。然れども私かに謂へらく、後の読者、或いは以て阿波国学校の沿革を観ること有らむと。復び作蔵に囑して之を書す。十八年三月、斯文又た記す。

### 【訳文】

この師範学校記を書き終えると、大書記官の大越亨氏に見せた。大越氏は言った。「これは徳島の学校の優れた歴史です」。そこで仙田作蔵氏に頼んで揮毫してもらい、軒に掲げた。今、明治十八年二月十日午前七時、体操場から出火し、強風のもと火が燃えさかり、十時になってやっと鎮火した。高く聳え立っていた屋根は悉く焼け落ち、蜂須賀氏の書物も多く焼失

した。そして「発蒙啓滞」の扁額や、仙田氏揮毫の書も、みな無くなった。どうして深く嘆かずにいられよう。もはや校舎は無く、この文も用いるに由ない。しかし、ひそかに思うに、後にこれを読む者は、もしかすると阿波国学校の沿革を知ることがあるかもしれない。そこで再び仙田氏に頼んで筆を揮ってもらった。明治十八年三月、岡本斯文、再びこれを記す。

#### 【語釈】

○大越亨…『明治徳島県官員録職員録』（文献③）を検すると、明治十七年の大書記官の項に、従六位・福島県の人として名前が見える（一三八頁）。斯文の原文では「大越亨」となっているが、右の文献によって「亨」に改めた。因みに、当時の県令（今の県知事にあたる）は酒井明という人（従五位・愛知県）であり、大書記官はそれに次ぐ官職である。○仙田作蔵…未考。

#### むすび

以上、岡本斯文の「徳島師範学校記」を七段に分ちつつ見てきた。かつての「大書記官・大越亨」も述べているように、この「記」は、幕末から明治にかけての阿波国における教学の歴史を知るのに恰好の文章であり、また、それを書いた斯文という人についても、彼が西丸の地を輓近阿波国教学の原点とし、わけても師範学校をこそその正脈を汲むものとして重んじていた事情が知られる。彼の書き記さなかった事柄を他の諸文献から補うこともできるが、それでもなお、「当事者の眼」から見た教学変遷の記憶として、その価値を失わぬであろう。本稿では、そのようなものとして、彼のこの文章を紹介してきたのであった。

〔附・岡本斯文略年譜〕（主に文献②の石田園坡「岡本斯文」に基づき、一部、文献④の藤沢南岳「岡本午橋碑銘」（午橋は斯文の別号）等）に依った。石田氏の記事は、斯文の女婿・岡本対南の「行状書」を訓読した

ものが多いが占めるが、その原文には当たり得ていない）

・天保一四年（一八四三）（一歳）四月二四日、岡本晤叟（晤室）の子として生れる。家学を受け、のち那波鶴峯に学ぶ。

・慶応三年（一八六七）（二五歳）儒者役見習。

・明治二年（一八六九）（二七歳）文学助教。藩主侍読。

・明治三年（一八七〇）（二八歳）東京に遊び、安井息軒・林鶴梁に学ぶ。

・明治四年（一八七一）（二九歳）八月帰郷。三等教授。

・明治六年（一八七三）（三一歳）小学校教員となる【注一】。

・明治八年（一八七五）（三三歳）富田小学校創設【注二】。

・明治一〇年（一八七七）（三五歳）女子師範学校校長心得。

・明治一二年（一八七九）（三七歳）徳島中学校校長心得。

・明治一五年（一八八二）（四〇歳）徳島師範学校校長。徳島女学校校長を兼ねる。

・明治一六年（一八八三）（四一歳）文部省より六国史と硯箱とを賜る【注三】。

・明治一八年（一八八五）（四三歳）師範学校校長を辞す。女学校校長。師範・中学校教諭を兼ねる。

・明治二四年（一八九一）（四九歳）女学校閉鎖。私財を投じて養淑会を創める。

・明治二七年（一八九四）（五二歳）退職。

・大正八年（一九一九）（七七歳）歿。

【注一】「四十宮北邙墓表」（『楽瓢庵詩文鈔』巻上・四六葉）に、次のような記事が見える。

明治元年五月。与余同以蔭補儒官。四年亦同為徳島藩学二等教授。

（中略）六年亦同為小学教員。（中略）九年転為師範学校教員。

明治六年の小学校教員というのは、おそらく「一番小学校（のち期成

小学校」のことかと思われる。北邨とともに斯文もまたその教員となったことが分かる（明治元年の「儒官」というのは、明治二年の「文学助教」のことであろうか）。

【注二】文献②には事跡だけが記されて年代は示されていないため、文献②③によって補った。明治八年当時は、「抽栄小学校」（東富田本掃除町）

と「長勁小学校」（西富田弓町）とであったが（六四頁の一覧表）、明治九年に「東富田小学校」「西富田小学校」と改称され、さらに明治十四年になって「富田小学校」とその「分校」といったふうに改編されたとのことである（六八―九頁）。なおこの文献には、岡本斯文の「富田浦区学記」（漢文に返り点・送り仮名が添えられている）も載せられており（六六―七頁）、設立当時の資金集めの苦労や、「長勁」「抽栄」の呼び名の由来、およびそこに込められた意味合いなども述べられている。また斯文の顔写真も見ることができる（六七頁）。

【注三】『楽瓢庵詩文鈔』には『明治十七年三月二十八日。文部省賞教育之勞。賜六国史及硯室。感恩之余賦此』という詩の題が見え、『不知風化日加新。猶読前経友哲人。浅学羞無英士出。微勞豈料渥恩臻。国書求古欽多福。硯室描花喜別春。努力自今何以報。恭承德意只修身。』と詠まれている（巻下・第七葉）。「十六年」と「十七年」と、どちらが正しいかは未考。

【備考】「武田丑太郎・歿後百年展」（文献⑩参照）で扱った林鶴一（一八七三―一九三五）が生れたのも掃除町であり、抽栄小学校（後の富田小学校）と同じ町内であった。文献⑩（七二―三頁）でも紹介したが、「略歴」（文献②③、下巻所収）から中学校入学までの記事を摘記すると、次のようになる。

・明治 六年（一八七三）六月十三日、林紉・林テフの長男として、徳島市富田掃除町に生れる。  
・明治一〇年（一八七七）徳島市東富田小学校に入学。後一年位にて

西富田小学校に転校。次に再び一年位を経て東富田小学校に転校。後、父・紉、名西郡下分上山（神山）村小学校長に転任すると共に上山村小学校に転校。父・紉、職を辞して徳島市に帰る。依つて三度、東富田小学校に転校し同校を卒業。

・明治一七年（一八八四）徳島中学校に入学。  
また、「阿部有清・歿後百二十年展」（文献⑩参照）で扱った小出寿之太（小出長十郎の孫。三高教授などを勤めた）は、近年明らかにされた年譜（文献①、一八八―九頁）によると、富田小学校の教員を勤めていたことがある。これも文献⑩（一三九頁）で紹介したが、関連する部分を抄出すると次のようになる。

・安政 五年（一八五八）一月四日生まれ。  
・明治 四年（一八七二）二月九日、徳島藩から算学教授申し付け。  
・明治 六年（一八七三）二月四日、名東県富田小学校教員。  
・明治一〇年（一八七七）二月二日、高知県から徳島師範学校勤務申し付け。

・明治一二年（一八七九）一〇月二〇日、京都府雇、学務課出仕兼  
中学師範学校八等助教。

先に触れたように、長勁・抽栄の両校ができるのは明治八年だから、明治六年に赴任したのは、富田小学校のもう一つの前身である「稚松小学校」のことかと思われる。これは東富田にあった蜂須賀氏の旧御殿に設けられたもので、明治六年十一月に開校が決定し、七年の二月二十日に開校したとされる（文献②③、五六頁に当時の「伺書」と「布達書」とが根拠資料として示されている）。なお、その所在地は『現在の徳島県庁の東側部分（かつての旧徳島中学校校舎部分）にあたるころにあったものと思われます』（六五頁）とされ、江戸時代地図（阿州徳島藩御家中録）も併せ掲げられている。また『稚松小学校



は、明治十一年には廃校となり、東富田小学校に併合されました(同)とも述べられている。いずれにしても、小出寿之太は林鶴一が入学する年に師範学校に転出しているのだから、小学校で彼が林を教えるということはなかったであろう。三高時代については、《余ガ三高在学ノ際ニ余ノ師タリ》と林自身語っている(文献②、左・一六頁。文献⑪・一三九頁でも紹介した)。

## 参考文献

- ① 安藤洋美「明治数学史の一断面」『数理解析研究所講究録』第一一九五卷(二〇〇一 京都大学。同大学のリポジトリ「紅」で公開されている)
- ② 石田園坡「岡本斯文」(市原理之・編『阿波人物鑑』(一九二八・御大典記念。徳島日々新報社)附録『阿波近古史談』九一〜九三頁。国立国会図書館のデジタルコレクションで四二四〜四二五コマ)
- ③ 岩村武勇・岩村富夫「明治徳島県官員録職員録」(一九六九 徳島県教育会)
- ④ 太田 剛「阿波・淡路に存在する日下部鳴鶴・巖谷一六の書碑について」『書論』四二号(二〇一六)
- ⑤ 岡田鴨里「蜂須賀家記」(明治九年「一八七六年」)
- ⑥ 佐光昭二「阿波の洋学事始」(一九八三 徳島市立図書館)
- ⑦ 佐藤千早(編)「内町小学校沿革史」(一九七一 内町小学校創立百周年記念事業協賛会発行)〔編者は内町小学校校長(当時)〕
- ⑧ 竹治貞夫「近世阿波漢学史の研究」(一九八九 風間書房)
- ⑨ 田中敏生「十訓抄」の副助詞タニとサへ―中世説話集における〈相対的軽少性〉(周縁波及性)の意義の一確認(其二)―『四国大学紀要(人文)』四九号(二〇一七)〔四国大学機関リポジトリ〕からpdf版で公開されている。文献⑪⑫⑬も同様
- ⑩ 田中敏生「武田丑太郎・歿後百年展に寄せて―展示資料の解説を中心に―」『凌霄』二一〇号(二〇一八 四国大学附属図書館)
- ⑪ 田中敏生「武田丑太郎・歿後百年展関連企画―阿部有清・歿後百二十年展に寄せて―展示資料の解説を中心に―」『四国大学紀要(人文)』五〇号(二〇

一八)

- ⑫ 田中敏生「〔資料〕那波蜷北の作品四篇―阿部有清・歿後百二十年展への解説補遺を兼ねて―」『四国大学紀要(人文)』五一号(二〇一八)
  - ⑬ 田中敏生「〔資料〕岡本斯文の「徳島中学校生徒に与ふる書」―阿部有清・歿後百二十年展への解説補遺を兼ねて(其二)―」『四国大学紀要(人文)』五一号(二〇一八)
  - ⑭ 徳島県教育委員会(編)『徳島県教育八十年史』(一九五五 徳島県教育委員会)
  - ⑮ 徳島県尋常師範学校(編)『阿波国教育沿革史』(一八九二)〔国立国会図書館のデジタルコレクションで公開されている〕
  - ⑯ 徳島県立博物館「デジタルミュージアム・展示室3歴史分野・徳島城下町絵図・徳島御城下絵図」〔文献⑬では「徳島藩御城下絵図」  
<http://www.museum.tokushima-ec.ed.jp/3/default.htm>
  - ⑰ 徳島市市史編さん室(編)『徳島市史別巻地図絵図集』(一九七八 徳島市)〔徳島藩御城下絵図〕を収める〕
  - ⑱ 徳島市助任小学校創立百周年記念事業協賛会(編)『助任小学校の百年』(一九七一 同協賛会発行)
  - ⑲ 「徳島中学校城南高校百年史」編纂委員会(編)『徳島中学校城南高校百年史』(一九七五 城南高校。本稿では「百年史」と略記する)
  - ⑳ 富田小学校創立百周年記念事業協賛会(編)『拙栄百年―富田小学校の沿革』(一九七四 同協賛会発行)
  - ㉑ 中山茂純「阿淡年表秘録」(嘉永四年「一八五一年」)〔徳島県史編さん委員会(編)『徳島県史料第一巻』(一九六四 徳島県)所収。引照は後者による〕
  - ㉒ 林 鶴一「徳島藩ノ数学者ニ就テ」〔林鶴一(編)『阿部有清先生伝 武田丑太郎先生伝』(一九三一 仙台)所収。後、次掲の文献㉓・下巻に(25)として収める。引照は前者による〕
  - ㉓ 林博士遺著刊行会「林鶴一博士和算研究集録(上・下)」(一九三七 東京開成館)
  - ㉔ 藤沢南岳「岡本午橋碑銘」〔竹治貞夫「阿波碑文集(正篇)」(一九七九 油印)所収〕
- 〔附記〕藩主として何代目であるかを言うのに、蜂須賀家政を初代と数えるか、次の至鎮(よししげ)を初代とするかによって、一代ずれることになる。本

岡本斯文の「徳島師範学校記」―阿部有清・歿後百二十年展への解説補遺を兼ねて（其三）―

稿では後者の数え方によることにした。なお本稿は、本学言語文化研究所の共同プロジェクト「凌霄文庫所蔵資料に基づく近世・近代阿波文化の研究」による研究成果の一部である。

（田中敏生 四国大学文学部国語学研究室）